

## 染みる職人芸 ケヤキの急須台

そばに置きたい



2月15日のこの欄で、益子焼の急須を紹介しました。今回は、そうした急須を置くのにぴったりの「急須台」を紹介します。

急須をテーブルなどに直接置くと、たれたお茶などで染みがついてしまうことがあります。古来からある道具ではなく、誰のアイデアかは今となっては分からないのですが、お盆やおわんを作る時に出る端材を無駄にしないようにというエコの発想から生まれたとも言われています。

コーヒーポットを置いても絵になりますし、茶托としても使えます。

写真の急須台を作っているのは、島根県出雲市の森山口クロ工作所。当主の森山登さんは2代目です。ケヤキ材を



森山口クロ工作所の急須台 直径13.5センチで税抜き1800円。直径12センチは1400円。問い合わせは久野さんが関わる「手しごと」（電話03・6432・3867、火曜定休）へ。外山亮一撮影

ろくろで回しながら、鋭利な刃物でくりぬいて作っています。ケヤキは硬く、削るのは簡単ではありません。職人としては当たり前前の技術ではありますが、こういう技術を持つ人は少なくなってしまうました。

漆などの塗料を使わず、白木のままで、その分値段を抑えられます。また、使えば使うほど味わいが増してきます。

先代の勇さんは広島島の宮島で修業を積み、出雲で独立しました。各地の民芸店から様々な注文が入り、外村吉之介といった著名な民芸運動家も訪れるほどの腕前だったそうです。登さんはその腕を継いでいます。

（手仕事フォーラム代表

久野恵一）